
転生者の日常

田中中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の日常

【Nコード】

N9823X

【作者名】

田中中

【あらすじ】

どんな変な作品でも読めるぜって方にどうぞ。

転生者が擬人化したISとIS学園でハチャメチャ？やりまくり？作品です。

作者の初めての作品ですがどうかよろしく願いたします。

プロローグ（前書き）

どうも今回初投稿する、タナナです。駄目文でいたらないことがあります。よろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

目が覚めると僕、中田龍は見知らぬ部屋にいた。辺りを見回し部屋
お見る、部屋には扉も窓もなく完璧な密室だった。

龍「ここは所、私は誰」

まあ何かこれは定番だね。

しかし本当

龍「誰もいないなあ」

この先本当にどうしようかと悩んでいると

「ヤッホー、聞こえてる」

頭に直接響く澄んだ声がした。

龍「！」

「ちょっと聞こえてるなら返事してよ」

龍「……誰ですか」

一応聞いてみる。

「自己紹介がまだだね私はあれ神様」

神様ってゴットとか雲の上にいるてきなあれか？

龍「でその神様が何の用ですか？」

「その前に君の自己紹介がまだだね」

龍「あつ遅れてスイマセン僕は中田^{なかつ} 龍^{りゅう}です」

「うん、自己紹介が終わったところで早速本題に入ろうか……ズバリ君に転生し「是非ともお願いいたします!!」……決断が早いね」

「よしじゃあ君が行く世界はIS>インフィニット・ストラトスくだよ。」

えーっとISは確か、ある天才がこれまでの軍事兵器が一切通用しないうえに、女にしか使えないISという名のマルチフォース・スーツを作ってそれに偶然乗った主人公の話だったような。

龍「…ああ、あの主人公ハーレムのか」
別に、嫉妬とかはしてないんだからな。

「そう、そのISの世界に行くんだけど、何か欲しいチートはある……ああそうそうデフォルトでISは動かせるからあとオマケでISをあげる」

龍「そのチートに何か制限て有るの」

「特に無し」

龍「神様しばらく時間を下さい」

神様は二言で返事をしてくれた。

~~~~~

しばらく考えてから、これだという感じの案が浮かんた。

龍「神様、決まったあゝ」

「どんなのにするの」

龍「始めに何かに属性及び効果を追加す力と一人暮らしできる用に家事スキルのUPで」

「よしわかった、それじゃさっそく行くかい」

龍「ちょっと待った最後に重要なものがある」

「何？」

龍「ISを擬人化させてください、もちろん美少女で！」

「OKこんな感じでいい」

神様がそう言くと部屋を中心に光が集まり人の形になった。

その見た目はこれゾンのユーの身長を140cmぐらいにした感じの少女がいた。

龍「おつ……OKだよ神様、スッゲー可愛いじゃん！」

「そう、気に入ってもらえて良かったよ」

「名前は？」

龍「僕が決めるの？」

「君のパートナーだよ」

うー……えーつとよし髪が白いから

龍「名前はクロ」

「クロ？」

龍「そう、クロ」

「まあ、何も言わないよじゃあ名前も決まったことだし、行くかい」

龍「おう！」

そう言つと目の前が真っ暗になった。

意思が戻つたら部屋のベッドに寝かされていた。

龍「ここは所、私は誰」

本日？二度目のこのネタ……と言うよりクロさんがいないなあ？

そんなことを思っていると

？「教えてやろう、ここはIS学園で、お前はそのIS学園に侵入した者だ」

声がする方に目を向けると……織斑 千冬がいた。

おー原作キャラだー

千冬「お前はどおやってIS学園>ここくに来た」

龍「いや、どおやってって言われても、僕も今意識が戻ったばかりですから」

一応嘘は言っていない。

千冬「じゃあ何故来た」

龍「理由も無いです」

実際に理由も無いけど本当にクロさんどこにいるんだ…待機状態でもないし、聞いてみるか。

龍「あの一」

千冬「なんだ」

龍「えーっと僕と一緒に長くて白い髪の女の子居ませんでしたか？」

千冬「居たが、別の部屋だ」

龍「何故ですか？」

何故別の部屋だろう女の子だからか？

そう思っていたら別の答えが返ってきた。

千冬「それはあの少女がどこの国にも無い形のISを起動させたからだ」

…？ISの擬人化だからかISを起動できるのかな？まっ無事ならいいか。

龍「あつ自己紹介がまだですね、僕中田 龍、性別は男です」

千冬「私は織斑 千冬だ」

知ってるよ、だてに原作読んでねーぜ。

龍「で、千冬さん僕はこれか、らどうなるのですか？」

千冬「事情聴取をしてから何も無ければ自由」

龍「有ったら？」

千冬「政府に引き渡す」

まあそんなところだろう。

龍「ところで、クロさ…、あの一緒に行た女の子はどうなるんですか？」

千冬「身元を調べてからIS学園>ここくに入学させることに成る  
だろお」

そうか、なら僕も一緒に入学するか。…でもどうやって……よし、  
早速チートを使おう。

言葉に説得効果お追加して。

龍「僕に入学のチャンスを下さい！」

どうだ、チートは働いたか？…

千冬「良いだろう…ついてこい」

そう言ってから携帯電話を取りだし誰かに連絡をした。

場所は変わり第三アリーナのピットそこで僕は打鉄>うちがね&向き合っていた。

千冬「どうした早く起動して模擬戦をしろ、それがIS学園の入学条件だ」

さつさとやるか、僕は打鉄に触れ起動させた、ハイパーセンサーで千冬さんの顔を見ると疲れたような顔をしていた…もしかして起動できないとも思ってたか？

龍「対戦相手は誰ですか」

千冬「もうアリーナで待機している」

相手はいつたい誰だ？…とりあえず出るか……アリーナに出るとラファール・リヴァイヴに乗った山田 真耶さんがいた。

真耶「あれ、男の操縦者ですか？」

それにしても二人めの原作キャラの登場かぁー元代表候補生だし頑張るか

龍「ハイ、名前は中田 龍です」

真耶「それでは、始めましょう」

龍「ハイ！」

始まりのブザーが鳴った…よしチート使いまくる。

始めに、真耶さんがレッドバレットで牽制射撃をしてきた。

それを上昇して避け近接ブレード展開>オープン<し近接ブレードに真空刃の効果を追加して真耶さん目掛けて振った。真空刃がラファ

ール・リヴァイヴの左肩の装甲に当たり装甲とシールドエネルギーを削った。

真耶「なっ何ですか？今の」

龍「ただの真空刃です…次は見える用にします」

よし真空刃に炎の属性を追加してまた近接ブレードお振るする炎を纏った真空刃が真耶さんに飛びそれを危ないところで回避する、そのあいだもう片方のてにもう一本近接ブレードを展開＞オープンくし真耶さんを中心に円お描きながら飛行し両手に持った近接ブレード「真空刃＋炎」を振りまくった。

何十という真空刃「炎」がラファール・リヴァイヴを襲う

真耶「キャア——」

シールドエネルギーは一気0になった。

試合が終わりピッドで着替えを済ませると真耶さんが入ってきた。

真耶「うう、また負けてしまいましたハア…ところであれは何ですか？」

龍「何となく出来ました」

真耶「そ…そうなんですか」

龍「ところで、勝ちましたしこれで入学出来ますよね！」

千冬「ああ、本当はISを起動出来た時点で入学は決まっていた」

龍「は…じゃ、何で模擬戦をしたのですか？」

千冬「お前の実力が知りたかったからだそれ以外に理由はない」

ハア…まあいいかそれよりこれでクロさんと一緒通えるぜ。…っ  
あそつえばクロさんに会ってないよし

龍「クロさんに合わせて下さい」

千冬「何故だ」

龍「会いたいからです」

千冬「そのクロという少女は反対側のピッドにいる」

僕は全力で反対側のピッドに移動しピッドの中に入る

龍「やあクロさん、おひさし」クロさんは僕を見ると近くに來て  
袖をもう離れないって感じに握ってきた……くう可愛過ぎだ  
よクロさん！

少しして千冬さんが入ってきた

千冬「それでは、お前らはIS学園に入学が決まった訳だが家は有  
るのか？」

家？…転生してきたから無いな

龍「無いです」

千冬「そうかなら学生寮を使え山田先生案内お私は書類をまとめる  
…それと入学式は一週間後だ」  
言ってさっさと何処かに行ってしまう。

真耶「それでは、学生寮に案内しますね」

龍「ハイ」

真耶「それと後で参考書が渡されますがしっかりと覚えて下さい」

龍「ハイ」

これからISS学園の生徒がクロさんと一緒に頑張るか。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？感想ダメ出し意見とつありましたらよろしくお願いいたします。

## キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

## キャラ紹介

なかた  
中田 龍 りゅう

性別

男

性格

基本クロさん第一で面白いこと第二  
何事も気にしない人

見た目

身長一夏より低く、髪が少し長い  
黒目黒髪の日本人

専用IS

クロ

待機状態

銀の腕輪

クロ

性別

女の子

見た目

これゾンのユーを身長140cmにしたような感じ

性格

基本何も考えないで龍の側に常にいる甘い物が好き

専用IS説明

名称

クロ

武装

クロさんが適当に出します

見た目

百式に黒のラインを入れて装甲は手、足、胸、頭に少しある程度の  
見た目

## キャラ紹介（後書き）

うまく、伝わらないかもしれませんが、すみませんm――m

## 第一話（前書き）

ハイ、見て下さった方ありがとうございます。  
第1話の投稿です。

## 第一話

ふぁゝ……眠い……つうか、一夏以外全員女子……後で一夏に挨拶しておくか……寝ようZZZ……

パンツッ!!

…なんだ？

一夏「げえっ、関羽」

パンツッ!!

千冬「誰か三国志の英雄か、馬鹿者」

何だ、一夏が馬鹿しただけかもう少し寝れる……ス……

スパーンという音と共に頭に激しい衝撃と痛みがはしった！

龍「つうゝ？」

しばらく痛みに苦しんでいると前の席にいるクロさんが頭を撫でてきた。

龍「クロさんもう大丈夫」

千冬「次は中田お前の番だ」  
席を立ち上がり

龍「はい、えーっと中田 龍ですよろしくお願いいたします………以上です」

がたた、という音と共に席に座ろうとしたら  
ドゴ

龍「あだ！」

さつきより威力が上がった一撃が襲った

千冬「お前も織斑と一緒に挨拶も満足にできんのか」  
一夏がやっぱり、そうだよな顔をしていた。

龍「？…一応名前は言いましたよ？」

自己紹介はしっかりやったはず？なのに何で。

千冬「ハアゝもおいしい、次」

あー次はクロさんが何て自己紹介するんだ。まだISってことは言  
ってないし。

クロ「……クロ……です……よろし……く……以上……です」

織斑先生が振りかぶるのが見えた。急いで降り下ろされる出席簿を  
手で受け止め。

龍「織斑先生クロさんを叩かないで下さい」

なんか一夏が、なん…だときな顔をしていた。何で？

沈黙を破るチャイムが鳴った。

千冬「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知  
識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に  
染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事を  
しろ、私の言葉には返事をしろ」

やっとSHRの終わりか少し時間があるな挨拶しておくか。つか席  
近いな前がクロさんでその右が一夏か。

龍「織斑一夏君、僕は中田龍まゝ龍って呼んで」

一夏「ああ、俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれこれから宜しく…  
ところで龍お前は大丈夫か？」

大丈夫？ああ皆の視線？が

龍「ん、別に気にしてない」

一夏「そうか、俺は無理もし視線に物理的ダメージがあつたら死んでる」

龍「つま慣れる…それじゃ1時間目が始まるぞ」

一夏「おう、また後で」

そして1時間目が終わり2時間目までの休み時間ポケ〜としていた  
ら一夏があれは箒に連れられていくのが見えた。…どうするヒマだ  
…クロさんでも撫でるか。

ナデナデあゝ癒される…なんか回りが五月蠅いけどいいか…っあク  
ロさんが気持ち良さそうに寝てる。しばらく撫でていると一夏達が  
戻ってきた…2時間目かクロさんを起こそう

龍「クロさん起きて」

クロ「…んっ、…おはよう…」

2時間目の途中一夏がチラチラこっちを見てくるその目にはお前も  
わかるのか？と言っている…はつきり言おうわからん！参考書なん  
てまったく読んでない。…何かを感じとった山田先生が一夏に

真弥「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

と、聞いてきたしばらく悩んでいた一夏が

一夏「先生」

真弥「はい、織斑くん！」山田先生その先は聞いてはいけない（笑）

一夏「ほとんど全部わかりません」

真弥「え……。ぜ、全部、ですか……。？」

あゝ山田先生が困りはててる

真弥「えーと、中田くんは大丈夫ですか？」

龍「はい」

山田先生の顔が少し明るくなる。

龍「ぜんぜん、わかりません！」

さっきまでの少し明るい顔が一気に暗くなった。

千冬「……………織斑、中田、入学前の参考書は読んだか？」

一夏「古い電話帳と間違えて捨てました」

龍「参考書？何それ美味しいの？」

パパアンツ！

千冬「必読と書いてあったらうが馬鹿者達が！」

千冬「織斑はあとで再発行してやる二人とも1週間以内に覚えろ。  
いいな」

龍「はい」

一夏「い、いや、1週間であの分厚さはちよと……」

千冬「やれと言っている」

一夏「……はい。やります」

一夏も無駄に抵抗しなければいいのに。それにしても1週間以内が無理だな。

キンコンカンコン。

1時間目が終わった。よしクロさんを一夏に紹介しよう。

龍「よう一夏頑張れ」

一夏「何で他人ごと？ところでその人は」

龍「クロさん、僕のパートナーだよ」

一夏「クロさん？まあいいかよろしくクロ」

クロ「…よろし…く…」

しばらくたわいない話をしていたら

セシリア「ちよつと、よろして」

一夏「へ？」

龍「OKだよ」

見事なドリルへ…ロールがかった金髪のセシリア・オルコットが話

しかけてきた。

セシリア「聞いてます？ お返事は？」

龍「いや、したけど」

一夏「あ、ああ。訊いてるけど………どういう用件だ？」

セシリア「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、

それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

実際に言われるとム力つくな見た目が、かわいくなけりや精神的に八つ裂きにしてるところだ。

一夏「悪いな。俺、君が誰かしらないし」

龍「彼女はセシリア・オルコット、入学主席でイギリスの代表候補生で専用機はB T>ブルー・ティアーズくちなみに代表候補生はその国の代表の候補生だよ一夏君わかったかね」

一夏「おう、だいたいわかった。」

セシリア「そうです、代表候補生であるわたしが、ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。なにせわたし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

一夏「入試って、あれか？ ISを動かして戦うやつ？」

セシリア「それ以外に入試などありませんわ」

一夏「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

セシリア「は……？」

セシリア「わ、わたしだけと聞きましたが？」

一夏「女子ではってオチじゃないのか？」

僕はもう関係無い。からな二人で楽しくやってろ。

キンコンカーンコン

っあチャイムだ席に着くか。

千冬「これからクラス代表を決めたいと思う、自薦他薦は問わない  
どうでもいいや、寝る

……

何かセシリアと一夏がガミガミうるさい。どうせお互いにけなしあ  
ってるんだろ。

千冬「それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナでオ  
ルコット、織斑、中田の三人で行う」  
へえー…… ってハイ

龍「何で、僕まで入ってんの？」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。それで中田お前は推薦された」  
やっぱりかあゝ

龍「ハァー、それじゃ… ハンデくれ！」

千冬「なぜだ」

そんな、何でって聞かれても。

龍「それは…僕が弱いからです」

セシリア「そんなに、ハンデが欲しいなら。ハンデを付けてあげましょう」

一夏「龍、本当にそれでいいのか！」

龍「いいよ別に…」

見てるほうが楽しいのに。…何か楽しくする方法は……あ。

龍「織斑先生、僕はクロさんを推薦します！」

千冬「今さらか」

龍「自薦他薦は問わないはずですよ」

千冬「まあ、良からう時間、場所は変わらずに、オルコット、クロ、織斑、中田のサバイバル形式で勝負する。それじゃ、授業に戻る」  
これで少しは楽しくなるかな。

## 第2話（前書き）

何か間違えた気がする

## 第2話

勝負が決まった日の放課後、僕、クロさん、一夏は教室で勉強をしてた。まあクロさんは勉強の必要はないけどそれにしても相変わらず女子の視線がすごいが気にせず勉強に励んでいた……いや、一夏はもうノックアウト寸前だな。

龍・一夏「ハァー、分からね〜」

当然だな。参考書を捨てた奴と有るけど見てない奴だからな。

真弥「ああ、織斑くんの中田くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

一夏「はい」

真弥「はい、織斑くんの学生寮の鍵です」

一夏「へ、しばらくは家か近くのホテルで通学のはずでは」

これは長くなりそうだな。

龍「一夏また明日」

そついいのこし、クロさんと一緒に学生寮へと向かう帰りの途中教室に忘れ物をしたことに気付き急いで取りに戻る。

龍「あつたあつた」

流石に寮の鍵がないと帰れないからな。……一夏はもう居ないか

龍「さあ、クロさん改めて帰ろうか」

クロ「…うん……」

学生寮に付き、僕達の部屋入ろうとしたら。バン隣の部屋から一夏が出てきて急いでドアを閉めた。

龍「一夏どうした？」

一夏「龍！ちょうど良いところに」

龍「何」

一夏「一緒に簾をせっ」

グサ……？

何でドアに木刀が刺さってんの？…って絶対、簾さんのしわざだ。僕はドアの近くにいき

龍「篠ノ之さん落ち着いてとりあ」

ガコ、何かが当たった…よう……な……

龍「うつ……ん、ここは何処？」

何故かクロさんが僕の隣で寝ている。

一夏「龍、気づいたか」

龍「あっうん、一応起きたでどうして、僕は寝てんの？」

一夏「そ…それわ」

箒「すまん中田、私が木刀で殴ってしまい、その本当にすまん！」

龍「いいよ別にもう過ぎた事だよあと僕の事は龍って呼んで」

箒「私の事は箒と呼び捨て、でいい」

龍「それで、いったい何があって一夏を追いつ出したの？」

箒「それは」

---

龍「だいたいの事情はわかった……まあ一夏が悪い」

そんなことが、あつたらなあゝ…箒もうんうんと言ってるよ。

龍「だけど箒いくら一夏が悪いからって暴力は駄目だよ！」

箒「…すまん……」

龍「よしそれじゃ時間だしご飯食べに行こう」

一夏「おう」

篤「そうだな」

龍「それじゃ、クロさん行くつか」

食堂に付き僕はクロさんと一緒にラーメン、一夏と篤は日替わりランチセットを頼んだ。

龍「美味しいねクロさん」

コクコク、クロさんが小さく首を振った、クロさん行動が可愛よ。しばらくして食べ終え僕らはそれぞれの部屋に戻った。

龍「ふゝ疲れた」

シャワー浴びて寝るか。

シャワーを浴び終え僕はベッドに入った

龍「クロさん寝よ」クロさんがもぞもぞと僕の隣に入ってきた。

龍「おやすみ」

龍「おっ一夏、篝おはよう」

一夏「…おはよう……」

龍「何でさつきから篝に謝ってるのまたヤラカシタか？」

一夏「いや…それが」

龍「まあ、いいやそれより朝飯食べよう」

一夏「ああ」

今回は四人そろって和食セットご飯に納豆がうまい。

「お、織斑くん、中田くん、隣いいかなっ？」

何か三人ほど朝食を持っていた。

龍「クロさん、篝別にいいよね？」

二人共無言で頷く

龍「OKだよ」

そう答えると即座に空いてる席に着く。

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだー」

龍「そっちは少ないっていうかほとんど無いに等しいな」

一夏「それで平気なのか？」

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

？「お菓子よく食べしー」

それはどうかと思うけど

龍「一夏、筭先に行ってる……あんまり喧嘩するなよ！」

---

2時間目が終わり一夏が話かけてきた。

一夏「駄目だまったくわからね」

龍「ふん、頑張れ」

一夏「頑張れってお前わかるのか？」

龍「いや、まったく」

一夏「じゃあ何で？」

龍「諦めたつまり…アーキレーターだ」

一夏「何だそれ」

龍「まあいい、次の時間が始まる」

何か山田先生が下着の話しやそれで女子がそれとなく胸を隠したり  
ISについて話してたな

キンコーンカーンコーン………あつ終わったそしたら一部の女子  
が一斉に僕の席にきた。……どうやら一夏も同じ状況らしい。

「ねえねえ、中田くん」

「今日暇な時間ある」

「後で一緒お昼食べようよ!」

龍「えーとだいたい暇だし、一緒に食べるのは、かまはないよ」

龍「あと、休み時間終わるから早く席に着いたほうがいいよ」

パンツ!

千冬「休み時間は終わりだ。散れ」

そんなにパンパン叩いて平気なのかな色々。

千冬「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

一夏「へ?」

千冬「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意する

そうだ」

一夏「????」

「せ、専用機!? 一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

うん一夏はまだ状況がつかめてないらしい。

千冬「教科書六ページ。音読しろ」

一夏「え、えーと……『現在、くくく禁止されています』……」

千冬「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか?」

一夏「な、なんとなく……それだったら龍にはないのか?」

龍「ん…僕はもうあるけど?」

まだ使って無いけどクロさんと言うISが僕の専用機としてある。

千冬「中田いつたいそれはどお言うことだ」

龍「そのままの意味ですが」

千冬「それはどこにある」

龍「織斑先生一度は見てるはずですよ」

千冬「どこでだ」

龍「それは秘密です」

ここで教えたらなんか、つまらなそうだから。

龍「それより授業が始まっていますよ?」

---

セシリア「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思って  
いなかったでしょうけど」

龍「いや、今回は使わないけど?」

セシリア「な、馬鹿にしていますのイギリスの代表候補生で専用機持  
ちの私お」

龍「そうじゃない、こっちにも色々事情があるんだじゃなきゃハン  
デが欲しいほど弱い僕が専用機を使わない訳が無い」

今回はクロさんも出場するからな、まあ推薦したのは僕だけ。

セシリア「そうですねまあ例え専用機を使つたとしても私が勝つに決まっていますかね」

もうどうでもいいや……そろそろ昼飯の時間だな一夏誘つて食堂に行くか。

龍「一夏、昼飯食いにいこんぜ」

一夏「ん…ああ、ちよつと待つて」

一夏が箸と何かを話している…あつ投げられた！一夏が無理やり引っ張つてゐる

一夏「よし、行こうぜ！」

龍「うん、クロさん行こう」

そう呼び掛けるとクロさんが僕のすぐ隣に来て袖を持った。

なんで、こうなった。…今僕らは何故か剣道場にて箸にフルボツコにされていた。何故だ、何故こうなった確か食堂で先輩がISについて教えてくれるとか言つて箸が断つてそしたら箸が教えてくれるらしく、そしたらこうなった？。

龍「だめ……もう無理……一夏お前と過ごした時間は楽しかった……」

一夏「いや、冗談はいいから……俺だつてきつい」

何故かあれから僕らは一夏が箒に一本負けし鍛え直すことになり次いでに僕まで被害にあった。

「なんか織斑くんと中田くんってさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとに動かせるのかなー」

龍「動かせるけどかなり弱いよ」

一夏「龍トレーニング、するか！」

龍「頑張つて僕は剣道だけでいい」

一夏「そんな固いこと言ふなよ一緒にやろうぜトレーニング！」

龍「はあ……わかった」

一夏「いよっしゃ」

---

一夏「——なあ、箒」

龍「ねえ、箒」

箒「なんだ、一夏」

龍・一夏「気のせいかもしれないんだが（だけど）」

箒「そうか。気のせいだろう」

龍「まあ、気にしない剣道だって無駄じゃないよきっと」

箒「そうだ、剣道だって無駄じゃないそれに一夏のISはないし龍のIS秘密とか言ってみたら本当にやったそしたらただでさえ、で」

真弥「お、織斑くん、織斑くん、織斑くんっ！」

龍「山田先生、落ち着いて。深呼吸はい、吸って、吐いて、吸って、吸って」

面白そうだから言ってみたら本当にやったそしたらただでさえ、でかい胸がさらにでかくなつた。

真弥「もう吸えません……………ぶはあっ！」

パアンッ！

千冬「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

龍「…はい……」

クロさんが優しく頭を撫でてきた。

龍「クロさんいつもありがとう」

真弥「それより、来ました！織斑くんの専用IS！」

千冬「織斑、中田、クロすぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているらな。」

龍「僕とクロさんは準備できてるけど」

僕は打鉄を装着しクロさんは自分を展開？していた。

第「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ。一夏」

一夏「え？ え？ なん……」

龍「早くしろ一夏」

一夏を連れピット搬入口ないき一夏の専用ISのところにむかう

一夏「これが…」

真弥「はい！ 織斑くんの専用IS『百式』です！」

千冬「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかつたな」

一夏が百式に触れ乗り込むと百式の装甲が閉じた

龍「それでは、一夏、クロさん、アリーナに出たら敵どうしだけど僕は負けない」

一夏「俺だって負けないぜ」

僕らはアリーナに飛び出た。

セシリア「あら、逃げずに来ましたのね」

そこにはブルー・ティアーズを装着したオルコットさんがいた。

セシリア「最後のチャンスをあげますわ」

龍「いらないから、さっさと始めよう！」

セシリア「そう？ 残念ですわ。それなら」

セシリア「お別れですわね！」

その言葉と共にスターライトmk?から閃光が飛び出た。

龍「一夏避ける！」

一夏「うおっ!？」

閃光は百式の横を過ぎたしたら一夏がオルコットさんに向かっていったこれはあれだなオルコットさんVS一夏だなよしジャマしな

いで隅でそつとしと。

一夏がミサイルに突っ込みもうだめかなと思ったたら百式の一次移行  
>ファースト・シフト<で助かった。もうそろそろ終わるかな……  
えっ僕何もしてないけどクロさんと一緒に観戦してた。

一夏「とりあえず、千冬姉の名前を守るさ！」

一夏がブルー・ティアーズに向かい突撃した。

一夏「おおおおっ！」

『セシリア・オルコット脱落』

一夏「……あれ、勝ったんじゃ」

龍「僕らがいるよ！」

一夏「あっお前ら一体今まで何してた！」

龍「隅で観戦してた！」

一夏「卑怯者、正々堂々戦え！」

龍「いや、何か戦いに入って行けない空気だったから」

龍「それじゃ、僕とクロさんは棄権します！」

今度こそ終わりに告げるブザーがなり

『試合終了。勝者——織斑 一夏』

一夏「………へ………」

ピットにて。

一夏「何で棄権なんてした！」

龍「もともと戦う気がなかったそれと一夏クラス代表おめでとう忘れてないよねこれはクラス代表を決める試合だったこと」

一夏「あっ」

龍「まあ、頑張れ一夏」

これでクラス代表をやらなくてすむ。

## 第2話（後書き）

オリ主がまったく戦っていない。  
……どうしよう

### 第3話

真弥「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。それと副代表はクロさんです。」

一夏がうなだれている。まあ、一夏がオルコットさんに勝ったのがいけない、もし一夏がオルコットさんの最初の一撃を受けていれば負けたけど。

一夏「先生、なんとかならないのですか？」

なんともならないから諦める

セシリア「一夏さん私に勝ったのだから自信を持ってください。それにクラス代表なら実戦が他の生徒より多いですし、ISの操縦も上手になりますわよ」

「そうそう、織斑くんやってみよう」

「やらなきゃ、損だよ」

セシリア「そ、それですな私がISの操縦を教えてさしあ

バン

第「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

龍「まあまあ、第そんなむきならないで、せっかく教えてくれるっ

て言ってるんだからねえ一夏？」

一夏「何で俺に振るそれよりも二人共そんな期待した目で見ないで！」

……はっ！鬼（千冬）がくる…

千冬「落ち着け、馬鹿ども」

パンツ

龍「酷くないですか、僕は二人を落ち着かせようとしたのに」

千冬「何か、失礼なことを考えただろう」

龍「はい、すいませんでしたー」

千冬「よろしい」

千冬「クラス代表は織斑一夏、副代表はクロ、異存はないな」

「「「はい」」」

僕は今とあるグラウンドに居る、まあISの操縦実習かな？もちろん僕を除いた全員がISスーツに着替えている。僕は着替えがめんどいし、着替えなくても動くからISスーツは着ないだから僕は

普通の制服だ……一応許可は得ている。

千冬「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらつ。織斑、オルコット、クロ。試しに飛んでみせろ」

千冬「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

クロさんとオルコットさんは展開しているが一夏が明らかにてこずっていた…一夏がやっと展開した。

千冬「よし、飛べ」

オルコットさん、クロさん、一夏の順で飛び立ち上昇の途中でクロさんがオルコットさんを抜き一夏はダントツのビリ

千冬「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズより白式の方が上だぞ」

龍「一夏、頑張れ」

僕は専用機が有るけど無いから今は関係ないし、気楽だな

千冬「織斑、オルコット、クロ、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

まず始めにオルコットさんが急降下してきた普通にクリアした次にクロさん急降下してきて完全に地表から十センチのところで停止した……流石クロさん、擬人化ISはだてじゃない。

続いて一夏かが……ズドン……うん地面に正面衝突した、うわす

ごいクレーターだ。

千冬「馬鹿者。誰が地上に衝突しろと言った。グランドに穴を開けてどうする」

一夏「すみません」

龍「一夏、ドンマイ」

千冬「まあいい、次は織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

一夏「は、はあ」

千冬「返事は『はい』だ」

一夏「は、はいっ」

一夏が集中を始めたなら光の粒子が集まり一本の刀になった。

千冬「遅い。○五秒で出せるようになれ」

千冬「次、オルコット、クロ、武装を展開しろ」

セシリア「はい」

すぐに光が集まり形を成す。オルコットさんの手にスターライトmk?クロさんは……ピコピコハンマー?ナンデ?

千冬「クロ、それは何だ?」

クロ「……………」

千冬「中田、説明しろ」

いや、説明しろと言われても

龍「ピコピコハンマーですかね？」

千冬「何で疑問系なんだ」

龍「いや…あの、その」

何でクロさんの武装がピコピコハンマーなのかわからないし、クロさんが武装を展開したところなんて初めて見た。

千冬「まあいい、次の武装を展開しろ！」

二人は武器を収納し、次の武装を展開する。オルコットさんは何秒かして近接用武器インターセプターを展開しクロさんはすぐに……何で次がミニガンちよつと極端じゃなあ〜い？

千冬「……遅い、この間にお前はやられている」

セシリア「実戦でわ懐に入らせませんわ！」

千冬「織斑に懐に入られたように見えたが？」

オルコットさんが目線で一夏に何かを訴えているまあプライベート・チャンネルでも使っているだろう。

千冬「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏が救いを求める目で箒を見たが、無情にも箒は去っていった。  
……はあ、しょうがない。

龍「一夏、手伝うよ」「一夏」…ありがとう…」

---

龍「という訳で……織斑一夏クラス代表就任&クロさんクラス副代表就任おめでとう……！」

「……おめでとう」「……」

龍「いえ〜い」

はい、こんにちは。今、織斑一夏クラス代表就任&クロさんクラス副代表就任おめでとうパーティーの始まりです。

龍「ほら、一夏もいつまでもグダグタ言っていない僕もある程度は手伝うから今は楽しもう！」

一夏「お前……いいやつだな！」

龍「よし、じゃパーティーを楽しもう！」

一夏に飲み物を差し出す。

龍「それじゃ、皆様カンパイ」

「」「」「カンパイ！！」「」「」

しばらく一夏、オルコットさん、箒と話し僕は思いつきの提案をした！

龍「よし！一夏、女装しろ！」

一夏「ちよつおま…突然何を言ってるんだ！」

龍「いいじゃん、ちよつとだけ、皆も見たいよね？」

本音「おりむゝの女装、見たゝい」

「うん、見たいかも」

「見たい見たい」

龍「ほら、皆見たいらしいしやってみよー」

一夏「だったらお前も一緒にやれ」

「中田くんかー見たいかも？」

「何か、似合いそう」

龍「OKやってやろーじゃないか」

「何これ？…き、綺麗」

「何この敗北感」

「何で、何でなの？」

あれから、すぐに着替えて今お披露目タイム、何人かの女子がブライドをズタズタにされていた。まあ一夏にロングカツラを付けて服を変えたら千冬さんに似ているからな。ん、僕？…普通に女装しただけだよ…変な視線を感じるけどきつと勘違い！。

龍「ちよつと疲れたから外に行ってくる」

部屋のドアを開けようとしたらドアが開き誰かが入ってきた。

龍「今晚わ」

薫子「ん、今晚わ」

一言挨拶をし、僕は部屋を出た、後ろにクロさんがついてきて一緒に外へ出てすぐ近くのベンチに座った。

龍「クロさん、疲れたねー」

クロ「……………」

誰かがちかづいてきた

楯無「君は誰かな？」

龍「えーと、中田龍です」

楯無「へ、中田龍くん？」

龍「はい」

楯無「何で、女の子の格好してるの？」

龍「…あっ……まあ色々あつたんです」

楯無「そうなの、……」

龍「えーと、あなたは？」

楯無「あつごめんなさい、お姉さんは更識楯無、生徒会長よ！」

龍「そうなんだ」

楯無「それじゃ、お姉さんは戻るね……あっそうそう、その格好可愛いわよ」

龍「そうですか」

生徒会長さんがどこかに戻っていった。

龍「クロさん僕らも戻ろうか」

僕らはパーティー会場に戻っていった。

### 第3話（後書き）

次回、あの人が登場です

## 第4話（前書き）

見てくれてありがとうございます。

## 第4話

一夏「龍、知ってるか？」

龍「知らない、というより何を？」

一夏「中国の代表候補生転校生が来るらしいぜ」

龍「よく、知ってるね」

一夏「さっき聞いた」

龍「まっお前は来月のクラス対抗戦を頑張れ！」

一夏「それ、筈たちにも言われた」

確か、クラス対抗戦の賞品として学食デザート半年フリーパスがあったな……クロさんも甘い物が好きだったような。

龍「一夏！」

一夏「何だ？」

龍「絶対、優勝しろよ！」

一夏「もちろんだ」

セシリア「今のところ一組と四組しか専用機を持ってませんし一夏さんなら大丈夫でしょう」

はっ……いつの間に近づいた。これが恋する乙女の力か？

第「そうだな」

お前もか。

鈴「——その情報、古いよ」

次は誰だ！声のした方に振り向きそこに小さな女の子がいた。

一夏「鈴……！？ お前、鈴か？」

鈴「そうよ。中国だい……」

龍「何、一夏知り合い？」

鈴「ちよっあたしの……」

一夏「ん、ああ俺のセカンド幼なじみの凰鈴音だ」  
ファンゼンイン

鈴「いい加減、あたしの話を聞けー！」

あっそんなに騒いだら！

バシンッ！

千冬「入り口を塞ぐなそれと五月蠅い」

鈴「す、すいません……」

さっきまでの威勢が嘘のように消え自分のクラスに戻った。

箒「い、一夏！さっきのセカンド幼なじみとは、どおいう事だ！」  
セシリア「一夏さん！？あのお方は何ですの！」

一夏「だからセカンド幼なじ」

バシン×2

千冬「席に着け、馬鹿ども」

あー……今日も平和だ……

---

箒「お前のせいだ！」

セシリア「あなたのせいですわ！」

龍「はいはい二人共、人のせいにしない、一夏が困ってるよ」

箒「しかし……」

セシリア「しかしですね……」

龍「一夏が気になるのもわかるけどとりあえず昼飯にしよう」

第「龍、それはどおいう事だ」

セシリア「中田さん、いったい何を」

わめく二人を無視し、僕クロさん、一夏 + α は食堂に向かった

第「ちょっと待てまだ話しが」

セシリア「待ってください話しがついて」

さっいこいこ

---

僕らはそれぞれ食券を買い、おばちゃんのところに向かった。

鈴「待ってたわよ、一夏」

一夏「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に  
通行の邪魔だぞ」

龍「それに、ラーメンのびるよ?」

鈴「わかってるわよ!それとあんた五月蠅い」

へ、……何で…親切で言っただけなのに……

龍「ううゝクロさん」

一夏「おい龍、元気出せよ、な？」

龍「…うん」

鈴「な、何よまるで私が悪いみたいじゃない」

龍「さて、お遊びもここら辺にしますか」

ズガ

一夏「ラーメンこぼさずよくコケたな……ちょうど出来たし」

龍「向こう、空いてるよ」

しばらく、一夏が紹介したり誤解を解いたり何かいざこざしながら過ごした。

そして放課後僕らは第3アリーナに来ていた、一夏がオルコットさんにISの操縦を教わるのが最近の日課だ。だが今日は箒が打鉄を装着してアリーナにいた。

龍「…あらかじめ言うておく争うなよ？」

箒「わかつている」

セシリア「わかつてますわ」

……だから  
言ったのに……そこにはボロボロになった一夏だった物と今だな戦  
いをやめない二人がいた。

龍「クロさん、なんとかして」

クロさんは無言で頷きISを展開し、その後武装を展開した……あと  
からクロさんに聞いた？が武装はランダムに出てくるらしい。さて  
クロさんの武器は……ハンドガンが一丁だけ、それを戦いを続ける  
二人に向けて撃ち残り少ないシールドエネルギーが無くなりISが  
強制解除された。

龍「最初に争うなよっていったよね？」

箒「しかし」

セシリア「でもですね」

龍「もおいしい、今日は終わりにしよう」

龍「一夏起きろー」

一夏「う、ああ、何？どうした？」

龍「今日は終わりだお疲れさん」

何もしてないのに疲れた帰る。

龍「それじゃ、また明日」

部屋でシャワーを浴び、何故か疲れたからすぐに寝ようとしたら隣の一夏、箒の部屋から騒ぎ声が聞こえた。

龍「何ですか、こんな時間に？」

一夏、箒の部屋に向かうたむ自分の部屋を出たら鳳さんが目の前を走り去った。

龍「おい、一夏何があった？」

一夏「いや、それが……………という訳だ」

龍「うん、まあ味方は少ないと思え、安心しろ僕は中立だ」

龍「それじゃ僕は寝る」

一夏「ああ、また明日」

---

龍「一夏、これ」

一夏「ん、何々……………（汗）」

龍「まあ、クロさんと一緒にガンバレ（笑）」

一夏が見ている紙に『クラス対抗戦日程表』一回戦一組代表、織斑一夏、副代表、クロVS二組代表、鳳鈴音、副代表、斉藤菜。

龍「これから特訓増やす?」

クラス対抗戦、一回戦目から楽しくなりそうだ!

## 第4話（後書き）

二対二のバトルうまく書けるかな？

## 第5話（前書き）

バトルが変かもしれません。  
すいません

## 第5話

二組との試合が決まってから数週間たった今一夏の特訓の量を倍ぐらいに増やしてといっても篤とオルコットさんが一夏に無理を強いてるだけなんだけど…クロさんはISを使うと疲れるのか最初の数十分で動きが鈍くなりそしてすぐ寝てしまう。

龍「今日がアリーナの使える日の最後だから今までの復習をするか」

一夏「いいよな、龍は専用機が無いから…こっちはすげー疲れた」

龍「性格にはあるけど今は無い」

一夏「なんだそりゃ？」

これからやる事などを話し合いながらピットに入ると

一夏「鈴か」

龍「ん、鳳さん」

鈴「待っていたわよ、一夏それとあんた、私のことは鈴でいいわよ、さん付けとかむずかゆい」

龍「僕は龍な鈴」

鈴「OK龍、それで一夏反省した」

一夏「へ？ なにか？」

鈴「だ、か、らっ！　あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

一夏「いや、鈴が避けてたし」

鈴「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言うたら放っておくわけ！？」

一夏「おう」

龍「帰っていい？」

一夏「俺を見捨てて行くのか？」

龍「大丈夫、何かあったら戻ってくるから、それに言っただろ、僕は中立だ……クロさん行こ」

一夏「頼む見捨てないでくれ」

僕とクロさんは一夏を無視してピットを出た。

ドガアアンツ……！

鈴がドカドカとピットから出てきてどっかに行った

龍「どおした……って！！何それ」

セシリア「……パワータイプですわね。それも一夏さんと同じ、近接格闘型……」

龍「いや、冷静に解析してないで何があった？」

第「一夏がヤラカシタ」

龍「そうですかい」

試合当日になり一夏とクロさんが二組の代表、副代表と戦う日だ

龍「まっ一夏今日はガンバレ……クロさんは気おつけて」

僕は最後に一言いい一夏とクロさんがアリーナに出るのお見送った。

龍「さて、大丈夫かな一夏？」

アリーナに甲龍を展開した鈴とラファール・リヴァイヴを展開した齊藤栞がいた、試合が始まり先手を打ったのは、鈴で衝撃砲を放ち一夏に当たり、続けざまに衝撃砲を放とうとしたらクロさんが展開したらしいスターライトmk?で狙撃した。

セシリア「な、何であの方がスターライトmk?を持ってるの？」

いや、偶然出たのだろう。

クロさんの狙撃を斉藤さんがシールドでガードし、近接ブレードで斬りかかりそこに一夏が雪片で斉藤さんの近接ブレードを受け止め、その隙にクロさんがスターライトmk?で斉藤を撃ち抜き、ラファール・リヴァイヴのシールドエネルギーを少し削りその時、鈴が横から衝撃砲を撃ち一夏に直撃し、一夏は地面に叩きつけられた。

鈴「あんた達やるわね」

一夏「お前らもな」

しばらくして斉藤さんが落ち二対一だとゆうのにお互いに一步も譲らない戦いをし、皆のシールドエネルギーが残り少なくなり、斬り合いをしていた一夏と鈴が距離をあけ次の一撃で決め用途して動き出した時

ズドオオオンッ!!

轟音が鳴りアリーナ全体に衝撃が走り何かが煙をあげながらアリーナに入ってきた!

一夏「な、なんだ? 何が起こって……」

鈴「一夏、クロ、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！」

鈴「あたしは時間を稼ぐ！」

何が鈴を狙う。

一夏「あぶねえっ……！」

一夏が鈴を抱えて避ける　その後、熱線が通りすぎた。

一夏「油断してる奴が勝てるのか？」

鈴「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

一夏「それより！　来るぞ！」

煙が晴れ全身装甲フル・スキンのISが姿を表した。

一夏「なんなんだ、こいつ……」

『織斑くん！　鳳さん！　クロさん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

一夏「それまで俺達が食い止めます」

突然、敵ISが突撃してきた一夏がそれを避け雪片で斬りかかりクロさんがスターライトmk？で撃ち鈴が衝撃砲でぶっ飛ばす。

鈴「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

一夏「みたいだな」

一夏「クロさん、援護頼む俺と鈴は突っ込む」

鈴「じゃあついくわよ!」

その頃ピットでは

龍「先生それ塩」

千冬「なぜ塩があるんだ」

龍「良かったでしね入れる前に気づいて」

真耶「あつ!　もしかして弟さんしんぱい……イ、イタイイタイです織斑先生」

山田先生がベッドロックされていた。

セシリア「先生!　わたしにIS使用許可を!　すぐに出撃できますわ!」

千冬「お前は無理だ」

セシリア「何故ですか?!」

龍「まあまあ、オルコットさんここは諦めて」

セシリア「あなたは心配じゃないんですか」

龍「心配だよ、もしあいつがクロさんに怪我させたら、ちりも残さずあいつを消す…怪我させなかったら先生に任せる」

真耶「あれ、クロさんの動き鈍くありませんか？」

セシリア「…本当ですわ…」

龍「もしかして、そろそろ限界？」

モニターを見ていたら熱線がクロさんに直撃し、クロさんはアリーナの壁に激突した。

うん、消そうちりの一つ残さず消そう

龍「織斑先生、僕ちよつと出かけて来ます」

千冬「どこ…」

最後まで聞かずにドアにどこでもドアの追加効果をし、アリーナに出た。

龍「クロさん大丈夫？痛くない？」

一夏「龍、いったいどこからきた？」

龍「ドアから」

鈴「扉はロックされているって報告があったわよ、なのにどおやっ  
て」

龍「普通に、それよりクロさんもう休んでいいよ後は僕がやるよ」

そう言うところクロさんは光の粒子になり銀の腕輪になった。

一夏「な、！？」

鈴「え？」

初めてクロさんを使うなじやあ殺るか

龍「行くよ、クロさん」

瞬時にISが展開される

一夏「なんだ、それISだよな何でクロさんが」

龍「前にクロさんは僕のパートナーだって言ってたよね」

鈴「ちよつ、え？」

龍「まあ、事情は後で説明する。今はこいつを消す」

僕は敵ISに突っ込み大爆発の効果をして思い切り殴った。敵ISと拳の間で大爆発がおきた。その衝撃で敵ISが吹っ飛び距離が開いた。

龍「クロさん武器お願い」

手に光の粒子が集まりハリセンが…展開される…どうする？…とりあえず叩くか。敵ISが放つビーム砲撃の雨を避けながら接近し、

ハリセンで叩く…

龍「若干シールドエネルギーを削ったかな？なら」

ハリセンに神速の効果を宿し、叩いたその間にも敵ISのビーム砲撃を避けハリセンで叩き徐々に敵ISのシールドエネルギーを削る。

龍「なかなか、減らないな……一夏手伝って」

一夏「何すればいい」

龍「僕が動きを止めるから止め刺して！」

鈴「それじゃ中に乗ってる人が」

一夏「大丈夫。あれは無人機だ」

鈴「何で判るのよ」

一夏「何てなくだ」

龍「それじゃ、やるよ！」

僕は敵ISに一気に近づき神速のハリセンでひたすら叩いた、ビーム砲撃を叩き落とし、殴り掛かってきたら弾き返し、動きをひたすら叩き撒くって動きを止めた、その隙に一夏が零落れいらくびやくや白夜を発動して思い切り敵ISを切り裂いた。

一夏「終わった…か？」

龍「クロさんもう大丈夫だよ」

ISが消え一人の少女になる

一夏「龍、そろそろ説明してもらいたいけど？」

龍「うん、えーと…」

視界の隅で敵ISが左腕を上げビーム砲撃を放つのが見えたところに出でビーム砲撃を受ける

一夏「龍、てめええー！！！！！！」

一夏がビーム砲撃を放つ敵ISに突っ込み雪片で止を刺したところで僕の意識が切れた。

目が覚めると白い天上が見えて薬品の匂いがした。

一夏「起きたか？」

龍「あれ、一夏？…痛」

一夏「無理すんな。俺はISが有って軽傷ですんだけど、お前はしばらく入院？だそんだ」

龍「入院ってここ保健室だよ」

一夏「まあ、ゆっくり休んめ」

龍「うー……クロさんは？」

一夏「お前のすぐ隣で寝てる」

龍「わかった、それじゃ寝る」

一夏「それじゃ」

僕はクロさんを抱き締めて眠りについた。

## 第5話（後書き）

どうでしたか。感想、評価、お待ちしています。

## 第6話（前書き）

ちよつとやり過ぎたかな？

## 第6話

龍「フウ……先生達少しは怪我人をいたわって欲しいよ」

あれから一週間一夏達に説明をしたり先生方の尋問にあったりした。

一夏「よ、元気か？」

ドアが開き、クロさん、一夏、箒、鈴、オルコットさんが来た

龍「無理、さっきまで尋問されてた…まっ今日で終わりだけどね」

鈴「大丈夫よ、尋問ぐらいあたし達もされたから、それよりはいい、お見舞いよ」

菓子が入った袋を差し出してきた。

龍「ありがとっ、じゃ皆で食うか」

菓子を食べながら学校やクロさんの事を聞いた。

箒「で、怪我はどうなんだ？」

龍「普通に動くぐらいはできる。」

箒「そうか、私達はそろそろ帰るからな。お大事に」

一夏「早く、怪我治して学校に来いよ」

龍「うん、じゃあな」

皆、帰ったな…クロさんは大丈夫そうだし、特にやることも無いし寝るか。

---

それから数日、毎日のように一夏達がお見舞いに来たりしてすぎた。

龍「うーん……リハビリがてら散歩するか。」

保健の先生に許可を得て外に出た。

龍「もう少ししたら一夏達がお見舞いに来る時間だし、少し歩いて戻るか」

しばらく歩いてると一夏達を見つけた。驚かそうとゆっくり行こうとしたら一夏達の前に、黒いスーツを着た奴らと白衣を着た男が立ち塞がった。

一夏「な、何なんだお前ら！」

セシリア「いきなり何ですか、あなた達、迷惑ですわよ！」

「ターゲットを確認、確保する」

懐から黄色の何かを出して投げてきた。轟音と閃光が辺りを埋め尽くす。しばらくして音と光が消える。視界が戻ると黒いスーツを着た奴らと白衣を着た男がクロさんを連れて行くのが見えた。

一夏「…みんな…大丈夫か!!」

箒「…私は平気だ…」

鈴「あたし…も」

セシリア「私も大丈夫ですわ…」

一夏「何なんだ、いたい！」

箒「おい、クロが居ないぞ」

僕は一夏達の隣を走り抜けクロさんを追いかけた。

一夏「龍、ちょっとまって…」

鈴「一夏、ぼさつとしてないで追いかけるわよ！」

一夏「お、おう！」

全力でしばらく走っていると奴らがクロさんを抱えながら逃げる姿が見えた。

龍「待ちやがれ、てめえらクロさんをどおするつもりだ！」

走っていると後ろから一夏、鈴、オルコットさんがISを展開し、奴らの前に立ち塞がった。

龍「やっと追い付いた」

一夏「龍、コイツらは何なんだ！」

龍「クロさんを狙った、どっかの何かだ！」

龍「さあ、クロさんを返して貰うぞ」

「やれ」

白衣の男がその一言を言うと黒いスーツを着た奴らが一斉にISを展開した。

一夏「IS!？」

セシリア「それも見たこと無い形ちですわ」

そのISはガラスみたいな装甲が付いた特殊なISだった。

龍「今さらISなんかはどうでもいい、けど…お前らクロさんを連れ去って、何するつもりだ」

「なに、珍しい物があるから解体して調べようとしただけだ」

ISを展開した奴らにオルコットさんがブルー・ティアーズで四方八方から狙い撃つ。だが全てのBトレーザーはガラスの装甲に反射された。

セシリア「なっ!？」

「あまい、私の会社で開発した最新型のISだ、レーザー系の攻撃は効かない!」

龍「皆もついいよ、後は僕が片付ける！」

「ISの無いキサマに何ができるというのだ！」

龍「お前らを殺ることができるけど」

自分に最強の効果を宿すこれから僕は理由無しに最強だ！

「おい、あのつをやってしまえ」

「了解！」

突っ込んで来たISを殴るそれだけで敵のISはシールドエネルギーを失ない強制解除される。……後三か。

「なん…だと、キサマ何をした！」

龍「殴っただけ、何かオカシイかい？」

今度はこっちから近づきISを蹴り飛ばし近くのISに当てる両方ISを強制解除されるこれで後一。

「ひっ…お、お前はいったい何なんだ」

龍「クロさんのパートナーでクロさんに危害を加える奴には、一切容赦はしない人」

「おい、何とかしろ！」

残った奴は距離を開けて遠距離から狙撃してくる…何かうざったい。  
ゆっくり敵のISに指を向けて

龍「バン♪」

何が飛んだか解らないが敵のISは大きくぶっ飛びISを強制解除  
される。

龍「後はお前だけ」

「わ、わかったこれは返すだから命だけは…」

龍「大丈夫、ちょっと半殺しするだけだよ♪」

「うわ、来るな化け物！」

龍「安心してすぐ終わるよ」

—

千冬「でっ中田がやったのか」

龍「はい♪」

そこには黒いスーツの奴らと白衣の男がきれいに山積みになされていた。

千冬「わかったもうお前は帰れ…ただし今回のことは郊外するなわかったな！」

それぞれ返事をして各自に部屋へと帰って行く。

千冬「中田！」

龍「はい？」

千冬「また後日、事情聴取だ！」

龍「…はい…」

クロさんを抱き抱え僕は保健室に戻る

龍「大丈夫、クロさんの敵は全て僕が消す」

今日は疲れた…

## 第6話（後書き）

最後まで見ていただきありがとうございます。

感想、意見などありましたらどんどんお願いします。

## 第7話（前書き）

もはや中2病か？

## 第7話

龍「くうーやっとな退院？か」

日曜出し学校も無いからー……部屋でゆっくりするか、クロさんにも会いたいからね。

龍「クロさん、ただいま」

クロさんが近づいて来る…頭でも撫でるか

一夏「おーい、クロさん昼飯食いに行こうぜー」

龍「わかった、ちょっと待ってて」

一夏「…龍？退院したのか！」

ドアを開けて一夏、箒が入ってくる。

龍「いきなり入って来るな」

一夏「それより、怪我はもういいのか？」

龍「うん、もう平気だけど？」

一夏「わかった、色々聞きたいけど今は飯食いに行こうぜー」

龍「それじゃ、行くか」

---

龍「久しぶりにラーメン食べたな」

一夏「それで、何で龍は生身でISを倒せるんだ？」

箒「そうだな、明らかにおかしい」

龍「さあ？僕も解らない？」

嘘だけだね。

箒「嘘だな！」

なぜばれた？

龍「まあ、いいじゃん皆無事だったんだから」

一夏「まあ、そうだな」

箒「一夏、それでいいのか」

一夏「いいんだよ。皆無事だったから…ほら、終わり良ければ全て良しって言うじゃないか」

箒「それはそうだが」

一夏「龍とクロさんは俺達の友達で仲間だからな」

第「……そうだな、龍、クロ色々すまなかった。」

龍「いいいいいよ、それにしても一夏……よくそんなセリフをすらすらと」

一夏「うつ、黙っとけ」

龍「それじゃ、僕はクロさんと一緒にそこら辺で散歩でもしてるよ」

ああ……いい天気だ…僕は今、日当たりのいいベンチにクロさんと一緒に座って日向ぼっこしている。

龍「ふあゝ……ネム……」

……Z、Z……Z……

?「…ね、……ねえてば」

龍「ん……誰?」

誰?この金髪さん……僕てきには銀のぼうが… IS<sup>うち</sup>学園の制服を

着てるからIS学園の生徒？か。

シャルル「ああ、僕はシャルル・デュノア」

龍「僕は中田 龍、まっ龍って呼んでよそんでパートナーのクロさ  
んだよ」

シャルル「うん、よろしく」

龍「……ねえ」

シャルル「ん、何」

龍「男、女？…どっち？」

シャルル「え、おん…ごほんごほん、男だよ」

龍「だよね、じゃなきゃ男子の制服を着てるはけないよね！…僕は  
そおゆう人かと…」

シャルル「う、うん、そうだよ僕は正真正銘の男だよ！」

龍「で、デュノアさんは何か用事でも？」

シャルル「うん、ちょっと道をそれと僕のことはシャルルって呼ん  
で」

龍「わかった、シャルル…それで何処に行くんだ？」

シャルル「え」と転校してきたから。その手続きをしに事務室まで。

」

龍「じゃ、クロさん起きて行くよ」

えゝ、事務室はあっちだな！

シャルル「もう、ここまででいいよ、ありがとう」

龍「あ、うんそれじゃ、クロさん今日は何食べようか？」

僕とクロさんはその場でシャルルと別れ部屋に戻った。

シャルル「ふゝ……ビックリしたよ、いきなりあんな事を聞かれるなんて……」

シャルル「明日から気お付けなきゃ！」

龍「ふあゝ……眠い」

一夏「龍、おはよう」

龍「ん？…一夏おはようございます…」

一夏「なんだ、その挨拶は」

いや、それはねえゝ

龍「だって、眠い！から仕方ない」

一夏「それをいうものなのか？…まあいいか」

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え そう？ ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「……？ ところで織斑君のISスーツはこのやつ？ 見たことない形だけど」

一夏「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作つたらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアイムモデルって聞いている」

龍「一夏、くわしいゝゝな…」

一夏「あくびしながらゆうなよ」

んゝん、毎日眠い、なんとかならないかな…あつ山田先生だ。

真弥「ISスーツは………あし  
からず」

いやー、さすがだな～だてに先生やってないね！

千冬「諸君、おはよう」

「「「おはようございます！」「」」

さすがです！織斑先生たった一言で教室に静寂を呼ぶとは。

千冬「今日から………で構わん  
だろう」

龍「先生ー」

千冬「なんだ？」

龍「ISスーツを着ない僕みたいな人は？」

千冬「好きにしろ……それと中田は今日の実習からクロを使ってで  
ろ」

龍「………なんで？」

千冬「クロはお前の専用機なんだろ、だったらでろ」

龍「………はい………」

「先生、それってどお言う意味ですか？」

千冬「そのうち解るでは山田先生、ホームルームを」

真弥「は、はいっ」

真弥「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「え……」

「「ええええええっ！？」」「」

うるさいクロさんが起きたらどうする、転校生が昨日そおいう人がいたな。

シャルル「失礼します」

？「……………」

シャルル「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願います」

「お、男……？」

シャルル「はい。こちらに僕と同じ……」

「きゃ……………」

シャルル「はい？」

「きゃあああああ——っ！」

う、うるさいだからクロさん起きたらどうするだよ！

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ」

真弥「皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

そういえば転校生は二人だっ……ふあー……たな。……Z

ラウラ「……………」

千冬「……………挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

ラウラ「了解しました」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

龍「ZZZ……………」

「……………」

真弥「あ、あの、以上……………ですか？」

ラウラ「以上だ」

「ラウラ！ 貴様が――」

ラウラが一夏に近づき右手を振り上げ、平手打ちを使用したらク  
ロさんが起き上がった！

「……っ！」

一夏「つて、クロさん」

バシ……クロさんは叩かれる手前で龍がラウラの平手打ちを受け止めていた。

バタ?...突然龍が倒れた

一夏「龍、おい！どう……し……たって寝てるだけか」

第「寝ててもク口を守るか」

床で寝てる龍にクロさんが近づき右手に触れて突然、光の粒子になり龍の右手に銀の腕輪になった。

「ラウラ…なっ！！」

シャルル「えっ！なんで」

「ええええええええ——」

この日一番のええええええ——が学園に響いた。

## 第7話（後書き）

見てくださり、ありがとうございました。

これから二巻に突入です

## 第8話（前書き）

いつもありがとうございます！

## 第8話

「ええええええー——」

……うるさいな

龍「うるさい、寝れないじゃないか！」

ガッン！

千冬「寝るな！バカ者！」

…痛い……あれ？いつもならクロさんが撫でてくるはず。……ク  
ロさんがいない！

龍「一夏！クロさんは？」

一夏は何も言わずに手首を指差す。

龍「…あら、待機形体だったのね…」

一夏「おいおい、口調が変わってるぞ」

「いやいや、それより何でクロちゃんが待機形体？になってんの」

「そうそう、普通あり得ないでしょう！」

ん〜ん……どうする？……」

千冬「あーうるさい！男の操縦者なんだからこれくらいあるだろう」

「先生いくら男の操縦者でもそれはちよつと……」

千冬「五月蠅い、それより次の実習に遅れないように各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！……それと織斑、中田、デュノアのめんどろをみてやれ」

よし！すぐ逃げよう最悪実習はサボる。…一夏はシャルルと挨拶をしてる少しずつ距離をとり…

龍「一夏！後任せ……」

一夏が僕のことを羽交い締めにする。

龍「…い、一夏君？…なにをするのかな？」

一夏「逃げずに一緒に行こうぜ！」

一夏が更に強く絞めてきた。

龍「わ、わかったから…放して。く、苦しい…から……」

一夏「よし、それじゃシャルルに龍……急いで行くぞ！」

龍「そうだね、急ごう、そうと決まれば、シャルル、ダッシュだー！」

一夏がシャルルの手を取り走り出す、その後に僕が続く。

「……………！ 噂の転校生発見…織斑君と手を繋いでる…………ハアハア！」

他のクラスの人に見つかった！

一夏「くそ、見つかった！」

「そこよ、追い込んで」

「者共、であえ、であえ〜！」

「中田君、ちょっと聞きたいんだけど！」

龍「無理！」

どうする、このままじゃ捕まる。…えーと…………あつ、よしあれだ。

龍「一夏、こつち！」

近くのドアに空間転移…………つまりどこでもドアの効果を追加して開ける。一夏、シャルルが入り最後に僕が入って直ぐドアを閉めた。

ガラ

「追い詰めた…………あれ居ない？」

「どこに行ったのええーい、者共、探せ探せ」

龍「ふー……助かったー」

一夏「あれ？何で更衣室に居るんだ？」

シャルル「へ？ え！？」

龍「ほら、二人共急いで、時間が無いよ！」

一夏「…やべ！ 直ぐに着替えて行くぞ！」

一夏が急いで着替え始める……え？僕、制服だけど。

シャルル「うあ！」

龍「はいそこ！いちいち反応しないで着替える」

シャルル「わ、わかってるよ！」

一夏「ふー……間に合ったー……」

龍「一夏は着替えるのが遅い、僕は着替えないから先に行ってもよ

かつたんだよ！」

一夏「まあ、いいじゃないか。間に合ったんだし」

セシリア「あら、だいぶギリギリでしたわね」

一夏「道が混んでいたんだよ」

セシリア「ウソおっしゃ」

龍「ウソじゃない、実際に人が大漁にいた」

セシリア「そうですか…いや、だったら間に合わないはず！」

龍「ハイハイ、細かい事気にしてると老けるよ」

セシリア「老けません！！」

鈴「あんた達、何してるの？」

龍「一夏、後ろだよ」

鈴「そうよ、バカ」

というより後ろ二組か……

セシリア「一夏さんまた転校生に叩かれるところでしたのよ」

鈴「はあ？　またなの？　一夏あんたバカなの！？」

んっ……………あっオワタ。

千冬「——安心しろ。バカは私の前にも二名いる」

バシーン！

アハハハハ…御愁傷様。

---

千冬「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「」「はい！」「」

皆気合い入ってるな——……………まあ約二名は呪詛を唱えてるけど。

どかつ！

龍「一夏どうした？」

一夏「何でもない」

千冬「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」

セシリア「な、なぜわたくしまで！？」

千冬「専用機持ちはすぐにはじめられるからた。いいから前に出る」

ん？ 何だあれは？……鳥……じゃない……IS？……真っ直ぐこつちに来てる！！

真耶「あああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

僕はすぐに横に飛ぶ。

龍「とお！」

ドカーン！

一夏「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事——」

むにゅ。

あゝあ一夏ヤラカシタよ。

一夏「う？。」

真耶「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

一夏の奴硬直してるよ、仕方ない。

真耶「そ、その、ですね……」

龍「おーい一夏そろそろ退けば？」

一夏「ん、ああ」

あゝオルコットさん何で銃身を一夏に向けてるの？…次の瞬間ちゅうちよなく撃った！

龍「……って、何撃ってんの！」

自分に手っ取り早い最強の効果をまた宿しオルコットさんの撃ったレーザーを蹴りあげた。

「「「えっ！？」「」」

セシリア「邪魔しないでくださいまし」

シャルル「いや、今ツツコムのはそこじゃないからね！」

鈴「次はあたしよ！！」

ガシーン、双天牙月を連結させて投げた。

鈴「いい加減にしろ！」

一夏に真っ直ぐ飛ぶ双天牙月を受け止める。

龍「これは、僕が没収します！」

鈴「ちょっと返さないよあたしの双天牙月！」

龍「それじゃ投げるな！」

千冬「いつまでも言い争いしてないで、さっさとはじめろぞ」

龍「そうだぞ、早くやらなきゃ!」

鈴「うるさいわね、やるから返しなさいよ」

龍「ハイハイ、ほら」

双天牙月を投げ渡す。

鈴「それで、どっちが先にやる?」

千冬「何を言っている二対一だ!」

セシリア「さすがに、それはどうか…」

千冬「安心しろ。今のお前たちなら直ぐ負ける」

うわ、二人のやる気がぐんぐん上がってるよ。…しかしどっちが勝つんだ?

千冬「では、はじめ!」

## 第8話（後書き）

次はちょっとした戦闘シーンと何かです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9823x/>

---

転生者の日常

2011年11月30日22時48分発行